hasegawa shiro

長谷川四郎作品集　第２巻

昭和41年８月25日初版発行
定　価　900 円

著　者　長谷川四郎
発行者　中村　勝哉
装　幀　長谷川元吉
発行所　株式会社　晶文社
東京都千代田区外神田２－１－４
電話（253）2093
振替　東京62799

印刷　第一印刷株式会社
製本　橋本製本所
● ©1966＜検印廃止＞落丁・乱丁本はお取替えいたします

長谷川四郎作品集／2

hasegawa shiro

阿久正の話

7——無名氏の手記より
7——悪い夢
18——神は真実を知る
32——熊
50——辻馬車
63——阿久正の話
84——チフス
95——ガングレン
111——ホタル商会
130——林の中の空地

解説　荒正人

遠近法

炭坑にて——147

古本屋——191

小旅行——227

ある画工の話——259

通り過ぎる者

上陸した火夫——301

時計物語——339

下宿——386

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

●第一巻の「シベリヤ物語」や「鶴」は
いきなり書きだして
一字も書きなおさなかったが，
第二巻の諸篇は，
ぜんぶではないが，
少くとも半分以上は苦労して書き，書きなおし，
無理に叩きおとしたようなものである。
そして結局，
私は職業的な作家でないことを知った。
●いつまでも戦争や軍隊にひっかかって
同じ夢が
くりかえし現われる。
それらは
なんどもスケッチをこころみたようなもので，
今はもう見なくなってしまったが，
とにかく
へたくそなスケッチのまま出すほかない。
●1954年「無名氏の手記」という本を出したが，
その中から三つの断片をひろいだして，
あとはすてた。
1955年の「阿久正の話」のうち
「足柄山」はどこからみてもつまらないので，はぶいた。
1957年の「遠近法」と1958年の「通り過ぎる者」は
そっくりそのままいれたが，
ただ中身の諸篇の題を変えた。
これによって多少は新鮮な感じを与えようという，
無駄な，
苦肉の策である。
1966年5月――――――――作者

阿久正の話

無名氏の手記より

悪い夢

昨夜、ぼくは中国の夢を見たのだが、ぼくは中国には一度も行ったことがない。ただ書物やグラフィックや人の話で知っているだけである。また、ラジオで中国語を聞いたこともある。女の人の美しい声だった。それなのに、ぼくが昨夜みた夢というのは、全くの悪夢だった。といっても、もちろん、これは中国のせいではなかった。悪夢に限らず夢というものは、みんな自分の内部に撮影されたものが内部で映写されるものらしい。それに、あの悪夢はたぶん、熱と薬品の作用だったように思う。ぼくはもともと、身体は丈夫なほうだ。自分のオルガニズムをあんまり意識したことがない。身体がいかに未知なものであるかを、お前はまだ身にしみて感じていないんだ、なんて病身の友だちは言う。或いはそうかもしれない。病気といえば、せいぜい風邪ぐらいしか知らないが、これだってこの世に四十年も生存していれば、もう見知らぬ客じゃない。何処からやって来たかわからないにせよ、とにかく三、四日も我慢していれば、おきまりのコースで、また何処かへ出てゆくのだから。風邪はぼくにはむしろレクリエーションだった。少しばかり声が変って、なんだか別人みたいな声になる。小さな子供だったときみたいに、鼻水がたくさん出てくる。ふとんの中に入って、今まで何度も読んだ昔話などをまた読みかえす、するとまた別個の想像力が湧いてくる。これら

はみな風邪の中の出来事だ。ところが、この二週間も前から微熱が出て、なかなかひっこまない。声は変らないし、鼻水も出ないのだが、それでいて、ぼくは自分の体内に何か未知なるものを意識する。いや、肉体そのものが未知なものに思われてくるのだ。ぼくの精神は神というものを意識しないのだが、肉体そのものは病気になると神を思い出すらしい。この神は新約の神じゃない。旧約の、創世記の神さまだ。天地創造の神さまだ。いったい、彼はどんなふうにぼくの体を作ったのかしらん、なんて考える。材料が土だという以外は、なんにもわからない。で、ぼくはとうとう、病院へ行ってきた。なに、たいした病気じゃないんだが、つまりその、未熟者の臆病というやつだ。

病院じゃない。医院だ。入院応需。戸をあけると、じりじりとブザーが鳴るようにできている。患者登場だ。一目でぼくは見てとったが、待合室は満員だった。それから、おきまりの額がかかっていて、それには春風駘蕩、鉄幹横春なんて書いてある。医者仁也なんて書いてないのはまだしもだ。待合室は満員だった。薄暗いところで、人々は玄関の上り框にまで腰かけていた。さかんに咳をする少年、しずかに眼をつむっている老婆、ぴーぴー泣く赤ん坊、それを抱いた痩せこけたおかみさん、細い首に繃帯をぐるぐるまいた少女、呼吸するたびにぜいぜい音のする中年男、それから、例えば、ぼくみたいに見たところ、どこもなんともないようだが、実は体内深く秘密の病気を蔵しているかもしれないような、インテリくさい男。まあ、こういった、互いに見知らぬ連中が一堂に会して、黙りこくって、じっと待っていた。ぼくもその仲間に入って座をしめたわけだが、なんとなく異分子のような感じがした。これはまだ、その雰囲気に慣れないところからきたのだろう。それに、ぼくはこういうところへ来ると、たちまち傍観者的になり、人々を観察したり、人々の話を傍聴したりするくせがあるのだが、そしてこれはほとんど無意識のうちに行なわれるのだが、昨日はそれが意識された。それでぼくはことさら眼をつむり、耳をふさいで、ただ自分の病気とだけ一緒にいるように工夫したものだ。他の人々も互いにほとんど話をしなかった。やがて、おもてにオートバイの大きな爆音がした。そのとき、ぼくは感じたが、集った患者たちは無言のうちにどよめいた。爆音がぴたりとやんだ。間もなく今度は隣室から咳払いの声が聞えた。権威者の咳払いだ。医者が往診から帰って来たのである。それから今度は小さな窓口がぱっと開いて、その中に女の口が現われ、なんぴとかの名前を呼んだ。誰かがすーっと立って、すーっと隣室へ消えていった。間髪を入れなかった。こうして、知らない名前が呼ばれる毎に、待たされた人々

は一人一人立ちあがり、入ってゆき、また出てきて、それから戸外へと立ち去り、待合室はだんだん空虚になった。ついには誰もいなくなった。あとにはただ彼らの残した手垢が、ぼろぼろの古雑誌類や子供の絵本などにくっつき、散乱していた。すでに夕暮だった。不幸な病人たちはいなくなった、その時である、奥の部屋部屋にあかあかと電灯がつき、別個の世界が現われてきた。いかにも裕福そうな家庭らしいざわめきが何処からともなくただよってきた。嬉戯する子供たちの明るい笑い声、若い娘の歌声、夕食の仕度をしている厨房の物音、女中と主婦の日常会話、――すべては医者の家庭の健康で幸福で豊かな生活ぶりを語っているように思われた。まさに医者というものの一族の典型的なあるべき姿のように思われた。そのとき、ふたたび診察室の小さな窓口が開いて女の声がぼくの名前を呼んだ。最後に一人だけ、ぼくが残って待っていたからである。

診察室は能率第一のアメリカ式事務室のようにきちんと整頓され、ぴかぴかの器具がならべられ、床屋みたいに明るかった。医者はぼくを知ってはいなかったが、ぼくの方では彼に見覚えがあった。……ははあ、この人か、とぼくは思った。赤ら顔で、小肥りで、細い金ぶち眼鏡をかけた彼が、スポーツマンみたいな、アメリカ好みのハイカラな服装で、ちょっと前までは自転車だったが、最近はオートバイにまたがって走っているのを、道路の上や麦畑の中でちょくちょく見かけたことがあったからである。彼は〈この最後のものV〉を見るような、同情ある、と同時に、これが最後だというような、ほっとしたような、それでいて疲れたような眼で、レンズ越しにぼくを見た。ぼくは黙々として半裸体になった。（その度に、身体検査をうける小学生みたいな気がする。）医者はなかなか愛想がよかった。

――また、どうなすったんです？　と彼は言った、一見旧知の如く。

彼はきれいな柔らかな真白なふっくらとした手をしていた。彼はその手を器用に使ってぼくの知らない器具をいじくっていたが、その器具をガラスのテーブルの上におくと、口で子供でもあやすように「あーん」と言いながら、その手で、ぼくという被造物の胸や背中を打診し、耳傾け、舌を出させ、口の中をじっとのぞきこみ、それから胸のポケットから聴診器をとび出させて、それでぼくの心臓の音を聞いた。その音は本人のぼくには聞えなかった。ぼくはただ、それを聞いている彼の顔を見ただけだった。その顔はしかつめらしくて、同時につまらなそうだった。彼は聴診器をはずして、その長い、よくはずむ黒いゴムを、馴らしでもするように、手にぐるぐるとまきつけてはなした。するとゴムはまたほどけた。

9　無名氏の手記より

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

——口の中がいたくありませんか？　と彼は言った。
——いや、べつに、ただ少し乾いたような感じがします。
——かるい口内炎ですな。
——これで二週間も微熱がずっと続いているのですが。
——なるほど、今夜あたりが峠でしょうな。
——大丈夫でしょうか？
医者は大きくうなずいた。
——こいつは伝染性でしてね、このあいだ、農家の人でしたが、あなたと同じ症状の人を診察しましたよ、ご近所じゃありませんか？
——さあ、存じませんが。
——その人はもうすっかりよくなって働いていますよ。大したことはありません、咽喉に温湿布でもなすって、……いま、薬をさしあげますから、……ま、用心にペニシリンでもうっておきましょうか、……いや、そのままで結構ですよ、どうぞ、……ただ、こいつは放置しておくと、エソから壊血病になるおそれがあって……
こう言いながら早くも彼は白い診察着をさっと脱ぎ、ノーネクタイのワイシャツ姿になった。お腹が少しつき出ているのがわかった。（美食家なんだ。）一方、壊血病と聞いて、ぼくはいささか恐怖の表情を浮べたらしい。ぼくの顔を彼は少しあざけるように見て、微笑し（とぼくには見えたが——）、ぼくの病気は二、三日もすればなおると断言した。一方、ぼくは、生来、疑ぐり深いたちなので、そうやすやすと治るものかと思っていた。しかし、われわれは互いに先を急いだ。ぼくは早く帰りたかったし、彼は早く終りたがっていた。ぼくと彼はちらりと視線を交しただけで、問答はしなかった。ただ、最後の仕上げにぼくはきいた。
——食事の注意はございませんですか？
——なにを召し上ってもよろしいですよ、と彼はばからしく丁寧だった、そしてメニューを列挙した。——パン粥、ポタージュ、その他ぼくの知らない食品のかずかず。
明らかに彼は早く終りたがっていた。今や台所で天ぷらでも揚げているらしい音が一だんと高まって、ぴちぴちと油がはね、まるで隣室からの呼び声のように聞えてきた。ぐーと、お腹の鳴る音も聞えたが、それは彼のお腹か、ぼくのお腹か判別しにくかった。
——食慾はおありのようですな、と彼は言った。
ぼくは退出するべく立ちあがった。そのとき不図、診察着を脱いで手を洗っている医者のズボンが眼についた。すると、電光石火、いささか熱のあるどんよりとしたぼくの網膜に、くすんだ緑がかった、カーキ色の乗馬ズボンが入って来たのである。下の方が急に細くなって、ボタンでと

めるやつだ。それは、たしかに、かつて人々が軍袴と称した将校ズボンにちがいなかった。丸腰の軍医！　われにもあらず、それはぼくに軍隊生活の記憶を呼びおこし、あの殺風景な医務室の板張り壁がぼくの脳裡によみがえった。ヨードチンキ、アルコール、石炭酸の匂い、部屋の一隅に立てかけてある巨大な日本刀、上靴や営内靴の音、花柳界に直結する軍隊俗謡、その中で丸腰の軍医が一人、炊事兵の持って来た魚肉を指のさきでつついている……。検食だ。魚肉はぶよぶよしている……。（このぼくもいまだにときどき軍隊の夢を見る。夢の景色は見るたびにさまざまだが、どれもみな同じ一つの気分につらぬかれている。もう永久に軍隊から出られそうもないというような、いらだたしく陰うつな気分だ――。）

――あなたも、あの、軍隊に？　とぼくは言っていた。

――え、軍隊ですって？

医者はぼくが彼のズボンに眼をそそいでいるのに気づいた。彼は片足を前にすっと出した、ちょうど、休めの姿勢で。

――これですかい？　と彼は急にざっくばらんな調子になって答えた。――わたしはこれでも陸軍軍医中尉殿だったのですよ、ハハハ。

彼はいわゆる磊落と呼ばれる調子で笑って、付加えた。

――不恰好ですが、家にいる時はこれに限りますな。

丁度、手を洗ってしまったところで、手は濡れていたが、彼は水滴をぽたぽた床にたらしながら、その白い肥った手で、壁にかかっている小さな金縁の額を指さした。それは拙劣なる水彩の風景画だった、気取ったローマ字の署名入りで。

――わたしはチャーチル会の会員でしてね、今でも暇があると絵をかくのが楽しみです、あれがその、華北に駐屯していました時の記念なんですよ、ごらんの通り拙いものですが、あれ一枚しかないものですから。

――いや、なかなか見事なものです。

ぼくは少し頭をうしろにそらし、儀礼的にその絵をしばし、うち眺め、薬を貰って帰路についた。診察料は思ったよりずっと安かった。

外は雨もよいの暗い晩だった。ぼくは駅の前を通りかかった。

小さな店々の灯火が奇妙にぼやけて見えた。赤い長いチョーチンに酒と書いてあった。電車からおりてくる人はまばらだった。駅の前は小さな広場になっていて、そのほとりに並んだバラックの店々に電灯がともり、それが照明のように、広場の上を照らしていた。そして、広場を舞台にして、二人の西洋カミソリ売りが芝居を打っていた。下手くそな演技だった。人々は素通りし、買手になるべき第三

者は決して現われなかった。照明係りの人々が見ているだけで、筋書は発展しなかった。二人は芝居をやめて、駅の中へ入り、「チェッ！」とかなんとか呟くのが聞えた。ぼくはとぼとぼ歩いていった。道路はやがて真暗になった。人っ子一人いなかった。ぼくは熱が少し高くなったような気がした。蛙が一せいに鳴き出した。雨が近づいて来たのだ。ぼくは畑や田んぼの中の道を長いこと歩いた。体の中に何か寄生虫めいたものがうごめくようで、何処からかぞくぞくと新しい熱が攻勢に出てきたような気がした。額が汗ばんだ。腺血病という言葉をぼくは思い出した。途中、田んぼの中で、道が四辻になっていて、道ばたの細い柱に電球が一つともっていて、ぼんやりと暗を照らしており、丁度その下あたりに、肥料を入れるようなセメントの四角い池があったが、そこには肥料が入っておらず、緑色の水が半分ほどたまっているのが見えた。ぼくはうなだれとぼとぼと歩いていった。そして、突然ぎくりとしてピタリ停止した。眼前に道路を横切る巨大な蛇がいたからである。ぼくは立ちすくみ、息を殺し、彼に気づかれはしないかとおそれたが、彼は完全にぼくのいることを無視しているようだった。ぼくは彼を見守った。彼は道路を横切ると草むらの中へわけ入った。もはや彼の姿は見えず、ただ一筋に草たちがざわざわとゆらぐのが見えた。ぼくは再び歩き出そうとして、また停止した。思いがけず蛇は再び草むらから姿を現わし、しかもいつのまにか非常に近づいていて、肥料槽のへりまできていた。彼はそこで少し鎌首をもたげ、あたりを見ているようだったが、次の瞬間するすると、その肥料槽の中へおりてゆき、かすかな音を立てて水中に落下した。そして落ち込むや否や、たちまちのたうち始めたのである。……彼はその入っていった水中から、周囲にそびえ立つ絶壁を、どうしてもよじのぼることができないのだった。ぼくはしばらくそれを見守っていた。雨が降り出して、水面に波紋をえがいた。蛇は山かがしだったが、一刻もやすむことなく、せまい肥料槽の中をぐるぐると無限軌道をえがいて泳ぎまわっていた。

ぼくは自分の小屋に帰ると、思い出して旧約聖書を開いてみた。そして創世記の蛇のくだりを読んでみた。――（……なんじは呪わるべし、……かれは、なんじの頭を打ち砕き……。）なんじとは蛇のことだった。かれとは人間のことで、つまりぼくのことだった。ぼくは蛇を不意に見て、奇妙な恐怖を感じた。ぼくは彼の頭を打ち砕いたりしなかった。しかし、彼が不幸な破目におちいるのを見て、一種意地悪な喜びを感じたことは確かである。（ぼくはおそらく彼にとっていないも同然だった。しかし、もしも彼の行動を少しでも邪魔していたなら、彼はその不幸に落ち込まなかっ

たかもしれない。そしてぼく自身、この夜の深みにあって彼がのたうちまわっていることを知らずにすんだでもあろう。しかも、ぼくは彼を助けにゆくのがこわいのだった……。）

薬を飲んだが、ききめは一向あらわれそうもなかった。（ぼくは劇薬みたいなものを期待していたのだ。）これじゃチフス患者に肺炎の薬を飲ましたようなものではないか、とぼくは思った。ぼくは独身者らしく手拭いの湿布を首にまき巻げ、床の中にもぐりこみ、長いことかかって、やっと眠りに入った。そして、奇妙な夢をみたのだった。

……はじめ、ぼくの眼に見えてきたのは、水彩画の風景だった。たしかに、あの診察室の壁にかかっていたものにちがいなかった。それは全部淡い色で塗られていた。（天然色で、おまけに匂いつきの夢だった。）背景の青空もうすい色だったし、その前方にひろがっている野原の緑もうすい色だったし、その上にうずくまっている二、三軒の民家の灰色もうすい色だった。見ていると、青空も野原も動かなかったが、民家だけが内部からうごめいているのがわかった。それから突然、それまで坐っていた二、三頭の駱駝のこぶのようにむくむくと起きあがった、そして画面一杯にひろがって、もう青空も野原も視野からさえぎられてしまった。額縁の中は一面に灰色で塗りつぶされたようにみえた。それから、その灰色がだんだん黒ずんできたと思うと、その中にぼんやりと光る字みたいなものが現われた。……春風駘蕩、春風駘蕩……、そうだ、たしかにあの待合室にかかっていたやつだ。それは太い楷書だったが、それが見るまに崩れて行書になり草書になり、やがて形なく流れたと思うと、再び楷書の形をとって現われてきたが、その時はいつの間にか、文字が変っていた、――鉄血救国、鉄血救国……もうそれは額に書いた字ではなくて、奇妙な形をした刀の鞘に書いてあるのだ。いや、あの刀は、どこかで、なにかの古雑誌の口絵で見たような気がする。（ひょっとすると、あの待合室で見るともなしに見た少年雑誌の挿絵だったかもしれない。）きっと、青竜刀と呼ばれるやつだ。それにしても、鉄血救国なんて、どこで読んだ文字だろう？　その青竜刀は中身がなくて、鞘だけだ。道ばたにころがっている。それが大写しにされているのだが、鞘のむこうに見知らぬ町がある。どこの町かわからない。見知らぬ町だ。戦争ですっかり破壊されて、もう誰にとっても見覚えのない町だ。人っ子ひとり見えない。廃墟の路上に一頭の馬が死んで横たわっている。灰色の、ロバみたいな馬だ。その馬の腹が急にむくむくと動く。そして、腹のさけ目から一匹の野犬が血だらけの牙をむいて出てくる。犬は道路を歩いてゆく。歩いてゆく。それはもう犬ではな

い。あわれな兵隊のようだ。餓えた日本兵だ。その時、街路の奥から何者かが砂煙をあげ馬をかって疾駆してくる。一瞬、すべては砂塵にかくれ、その中で重い刀がふりあげられる。……鉄血救国、鉄血救国、……馬上から力まかせに打ちおろしたようだ。馬に乗っている人物が見えてくる。あれは、綿入れの粗末な黒い軍服を着た中国人の若い兵士だ。彼の乗馬の足もとで、日本兵の鉄兜が叩きわられている。そのとき、何処か遠くの眼に見えないトーチカから眼に見えない機関銃の一斉射撃。彼の乗っている馬がやられ、彼は馬もろとも倒れる。……一瞬、彼ははっきりと見た、廃墟となった町のかなた、遠く大きくうねっている、ゆるやかな大河の流れ（祖国の河だ！）オルドスの冷い風が彼の上を吹き過ぎる……。彼が意識をとりもどしたとき、肉体は冷々とした、なめらかな土の上に寝ている。古い、なつかしい、かびくさい臭いがする。どうやら、民家の土間に寝ているらしい。窓からは、それは明るい秋の日ざし。戸外には漠然と人声がする。人声は初め遠くの方でがやがや言っているが、それがだんだんとはっきりする。彼は耳傾ける。ああ、彼にはわからない言葉、きっと、日本語にちがいない。それからまた、馬のいなきや、人々が足並そろえて行進するような音も聞える。彼にはだんだんわかってくる、どうやらこの場所は日本軍の占領している民家で、彼らの兵舎なのだ。だちまち彼は唸り声を立てて起きあがろうとする、しかしたちまち苦痛の叫びと共にその場にへたばってしまう。手足やあばら骨が骨折しているらしい。それにしても何故こんなところに入れておくのだろう？ 何故、惨殺しないのか？ 彼はじっと土の上に仰向けに寝て、眼をつむる。背中に、ひえびえとした大地が感ぜられる。（祖国だ！）彼の肉体には不思議にも切傷一つない。外から見たところ、まったく完全な身体だ。しかし、内部で骨がすっかり砕けているらしい。微動もせずに横たわっていても、身体の内部で、こわれた骨が頑強な痛みを発している。まるで間断なきモールス信号みたいだ。それは発信でもあれば受信のようでもある。それはときどき一瞬、やんだかと思うと、ふたたび前よりも痛烈に起ってくる。彼はますます強く眼をつむる。彼は敵にとりまかれている。しかし彼の寝ているのは、味方の祖国の土地である。そして、彼をとりまく敵をさらに広々ととりまいている故国の土と、そこに住む兄弟たちの姿が眼底に浮ぶ。彼の肉体の中のこの激しい痛みは、遠く、彼ら兄弟たちの苦しみと相応じているように思われてくる。……その時、突然、鍵をがちゃがちゃ鳴らす音が聞える。扉がぱっと開かれて、射し込む光線とともに、日本の兵隊が入ってくる。一人、二人、三人。彼らの一人が中国語らしい言葉でいう。

彼にはその意味がわかる、――「起きろ！」しかし彼は眼ばかりぎょろぎょろ動かし、身じろぎもしない、その眼はからからに乾いていて、憎悪がみなぎっている。兵隊の一人が兵隊靴で彼の頭を踏みつける。「××」と兵隊の一人が言う。もう彼にはわからない言葉だ。兵隊は彼を抱きおこしにかかる。この方が彼には、蹴られるよりも遙かに苦痛だ。しかし、彼はもう抵抗ができない。せいぜい歯で噛みつくことぐらいだが、これももう非常にむつかしい。それに日本兵たちは用心している……彼は非常な痛みをこらえて、かろうじて壁にもたれて立っている。しかし一歩も歩くことができない。「×××××××××」と最後の一人が日本語で言う。あとの二人が出ていって、すぐ何かを持って帰ってくる。担架だ、彼はその上に丸太みたいに倒され転がる。そして運び出される。なんと親切な処置だろう。歩けないなら、担架で運んでやろうというのだ。戸外は明るる過ぎる。まぶしい。初秋の涼しい風がそよそよと吹いている。空には伝書鳩が弧をえがいて飛んでいる。土塀でかこまれた中庭を担架で運ばれてゆくほんの短かい間、開かれた門から、彼は麦の穂がゆっくりと風にゆらいでいるのを見る。麦畑の上に一つ大きく咲いている黄色い花、ひまわりに違いない。（故郷の風景だ。）それから仰いで空を見る。青々として深い。雲が輝いている。その時、急にこの無窮の青空が低い煤けた天井に変っている。兵隊たちが彼を別の小屋に運び入れたらしい。病気の匂いがする。いや、うっすらと石炭酸の臭気がただよっているのだ。ああ、これは医務室の匂いだ。してみると、彼を運んできた兵隊たちは衛生兵かしらん？　これは民家の一室を改造した医務室だ。その片隅には巨大な日本刀が立てかけてある。中央には細長い、高い木の机があって、それには黒い防水布がかけられてある。床の上に石膏細工のかけらみたいなものがちらばり、切られて外されたギプスの巨大な片足がころがっている。彼は机の上におろされ、寝かされる。衛生兵たちが彼を丁寧に扱う。なにか手当てでもほどこされるみたいな気がする。長大な立派な体格だ。その時、急に隣室から大きな話し声や笑い声が聞えてくる。歓談し爆笑している。彼は歯を喰いしばる。自分の肉体だが、自分で動かすことができない。笑い声の主たちがどやどやと入ってくる。酒でも飲んでたみたいだ。彼らは寝ている彼を取りまいて立つ。そのうちの長とおぼしき一人は……小肥りで、赤ら顔で、細い金ぶち眼鏡をかけ、……綺麗な柔らかな温かな手をしてる、……丸腰の軍医中尉だ、……その手が彼の頬を撫で、優しい声がへんな中国語を言う、――「どうしたのかね？」「どんな具合かね？」下から見ると、軍医の顔はへんにゆがんで見える……そのとき、彼は突然、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.